

コミュニティ概念の現代的再検討

和田 清 美

1 はじめに—本稿の意図と限定—

近年とりわけ2000年以降、コミュニティ研究は、「理論」および「実証」、そして「政策」とさまざまに銘打った研究が目立って増えてきている。それは、「コミュニティの再認識」の過程のあらわれということが出来るように思う。こうした動きは、わが国だけでなく、海外においても見られ、グローバリゼーションの進展を背景に世界が同じく、コミュニティの問題に同時的に行き着いているともいえよう¹⁾。ところが、わが国にあっては、理論や実証といった分野よりも、政策の分野が先行していることは否めない²⁾。この点がわが国の最近のコミュニティ研究の特徴であるともいえようが、その一方で、ここ数年の間に、コミュニティに関する翻訳書が相次いで出版されている。それは主にコミュニティ概念の再検討であり、またコミュニティの実証的研究である。その内容については検討を要するとしても、日本のコミュニティ研究の現状から判断すると、やはり注目に値しよう。

そんな折り、筆者が所属する日本地域社会学会の年報編集委員会から、以下に示すコミュニティに関する翻訳書三冊の中から二冊を取り上げ、近年のコミュニティ研究の動向と関連させ評価を含めた論文の執筆要請を受けた。筆者からすれば、時宜にかなった、実にありがたい依頼であるので、謹んでお受けすることとした。指定された書物は、Z.パウマンの『コミュニティ—安心と自由の戦場—』（奥井智之訳、筑摩書房、2008年）、G.デランティの『コミュニティ』（山之内靖・伊藤茂訳、NTT出版、2006年）、R.D.パットナム『孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』（柴内康文訳、柏書房、2006年）である。

筆者は、このうちG.デランティの『コミュニティ』とR.D.パットナム『孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』の二冊を取り上げ、「世界的大変動の中のコミュニティ研究に求められるもの」と題する論文として書き上げ、すでに編集委員会に提出した。しかし、紙幅の都合上、言い足りないことも多く、またコミュニティ研究の動向とかかわる範囲の内容となっているため、あらためて、本紀要において、Z.バウマンの『コミュニティー安心と自由の戦場—』を含め、「コミュニティ概念」に焦点をおいた、3冊の翻訳書のレビューを行うこととした。

なお、上記の「世界的大変動の中のコミュニティ研究に求められるもの」と題する論文が掲載される『日本地域社会学会年報21集』（ハーベスト社）の発行は、本年（2009年）の5月である。そのため、本紀要の方が2ヶ月早い発行となるが、本稿執筆の経緯をご理解いただき、記述が一部重複する点についてはご容赦いただきたい。また、本紀要論文とあわせて、『日本地域社会学会年報21集』に掲載される論文をお読みいただくことを強く希望する。

2 安心と自由——Z. バウマンの『コミュニティー安心と自由の戦場—』

では、まず、Z.バウマンの『コミュニティー安心と自由の戦場—』をみていくこととしよう。バウマンは、「ようこそ、とらえどころのないコミュニティへ」と題する序章において、彼のそもそものコミュニティへの問題意識が記述されており、筆者はこれに関心をもって読んだ。

バウマンによれば、「コミュニティは、今日では失われた楽園の異名であるが、わたしたちはそこに戻りたいと心から望み、そこにいたる道を熱っぽく探し求めているのである」（同書、p10）と述べ、これをバウマンは、「『厳しい現実』、明らかに『非コミュニティ的』な、あるいは明々白々コミュニティの現実とは異なる『温かい感じ』に満ちた想像の（仮定の、夢想の）コミュニティ」（同上）と言い、このイメージに混乱をもたらすものこそ、「夢想のコミュニティと『既存のコミュニティ』との差異である」としている（同書、p11）。

「既存のコミュニティ」は、「あたかもコミュニティが実現して夢がかなえられたかのように見せかける集団であって、（そのようなコミュニティが提供するとされる、ありとあらゆる美名の下に）無条件の忠誠を求め、忠誠の不足をことごとく許されざる反逆行為として扱う。もしわたしたちが『既存のコミュニティ』の支配下にあるとすれば、そこから提供される、あるいは提供を約束される恩恵と引き換えに、厳格な服従を求められるであろう。安心がほしいか？自由を捨てよ、少なくとも自由の大半を捨てよ」（同上、p11）。

つまり、バウマンにとって、「コミュニティを失うことは、安心を失うことを意味する」のであるが、同時に「コミュニティを得ることは一たまたまそんなことがあればだが一即座に自由を失うことになる」（同上、p12）という。「このディレンマから逃れるためになしうることはほとんどない。そのことを認めないのは危険である。とはいえ、打てる妙手一つある。それは、提案された解決策が実行に移されたときにどのような成算があるか、さらに、どのような危険があるかを検討することである・・・本書で試みるのは、そのような検討作業である」（同上、p13）。

やや引用が長くなったが、バウマンの問題意識は、安全と自由の果てしない葛藤にあり、それ故、コミュニティは、「安心と自由の戦場」としての意味をもつのである。この意味は、終章において、「今日のコミュニティは、押し寄せるグローバルな潮流から身を隠す一つの避難所として求められている」と解き明かされるのである。

さて、本書の構成は、以下のとおりである。第1章「タンタロスの苦悩」、第2章「引き抜いて、植え付ける」、第3章「撤退の時代一大転換第二段」、第4章「成功者の離脱」、第5章「コミュニズムの二つの源泉」、第6章「承認を受ける権利、再配分を受ける権利」、第7章「多文化主義」、第8章「はきだめゲッター」、第9章「多文化の共生か、人間性の共有か」、終章「ケーキも食べればなくなる」となっている。

第1章では、コミュニティの本来的な意味・概念として、F.ターニスの言うところの「自然に生ずる共通の理念」と、G.ローゼンベルグの言うところの「暖かなサークル」を使い、序章で述べたコミュニティと安心・自由との関係

にふれている。また、とくにE.ホブズボームの指摘を踏まえて、最近頻繁に使われている「アイデンティティ」について、「コミュニティの代用品である」（同書、p26）と言及していることは大変示唆深い。この概念規定を踏まえて、第2章では、近代資本主義の展開と共に、人々が古い堅苦しいコミュニティから解放される過程を明らかにしている。その一方で、人々は必ずしも自由になってはおらず、古いコミュニティに代わって、人々はパプティコン（一望監視施設）型組織のなかで、新たな支配に組み込まれていく。つまり、そこでは、エリートが非エリートに対して「関与」する戦略がとられた。しかし、バウマンの言う「液状的」近代（＝大転換第二弾）の時代に入ると、「固定的」近代でとられた「関与」は、「撤退」の戦略にとって代わられる。これが、第3章の主題である。はたして人々は自由な競争によって本当に自由になったのか。第4章以下がこの分析に費やされている。

取り上げているのは、先にもあげたように、成功者の離脱、コミュニナリズム、承認を受ける権利、再配分を受ける権利、多文化主義、ゲットーなどである。バウマンの議論は大変わかりやすく、「グローバル・エリートの生活世界の『コミュニティ』と、その他の弱く恵まれない人々の『コミュニティ』がほとんど共通項を持たない」（同書、p89）との指摘のように、エリートと非エリート、グローバルとローカル、富者と貧者もしくは強者と弱者、「ゲーティド・コミュニティ」と「ゲットー」というように、二分して説明する。翻訳者の奥山氏はこの点を解説において次のように述べている。「筆者はここで、（R.ローティから借りた）跳ね橋の比喻を用いる。成功を収めたエリートは、自由の跳ね橋を吊り上げる。あとに続く非エリートは、それを渡れない、と。要するにここには、エリートと非エリートに分断された社会がある。それはさきに書いた、グローバルズとローカルズに二分された社会と同じものである。本書のなかでグローバルズの居住地として取り上げられるのは、ゲーティド・コミュニティ（周囲を塙で囲み、門に警備員を配した要塞的住宅地）である。それに対して最下層のローカルズの居住地として、ゲットーがとりあげられる。それらはともに、コミュニティの名に値しないと著者はいう」（同書、216）。

終章では、「わたしたちはコミュニティがないと、安心して暮らすことができない」（同上、p197）という文章から始まり、現代が「流動的で予測できない世界、すなわち規制緩和がすすみ、弾力的で、競争的で、特有の不確実性をもつ世界に、わたしたちはみなすっかり浸っているのだが、それぞれ個々別々に己の不安にさいなまれている」（同上）と述べている。その上で、筆者は、コミュニティリズムが計画するコミュニティについてあまりに単純化すぎると批判し、コミュニティが「今日の原子化した社会の病理と真っ向から対決しようとするならば、二つの課題がある」（同書、p203）とバウマンは言う。それは、「権利上の個人の運命を事実上の個人の能力に作りかえるのに必要な資源の平等化と、個人的な無力や不幸に対する集団的な保証の構築の二つである」（同書、p204）。そして、「もし、コミュニティが諸個人の構成する世界で存在しようとするならば、それは分かち合いと相互の配慮でおりあげられたコミュニティでしかありえない（し、またそうでなければならない）。それは、人を人たらしめる平等の権利や、そのような権利の上で人々が平等に行動することについて、関心や責任を有するコミュニティである」（同上、p204）と結んでいる。

以上が、コミュニティの概念にかかわっての本書の紹介であるが、コミュニティが安全と等価のものとして扱われており、コミュニティを失うことは安全を失うことを意味し、コミュニティを得ることは自由を失うことを意味するという説明は、筆者にはきわめて素直に受け止めることができた。何故なら、日本のかつての地域共同体（典型としての「ムラ」）がこのような面を持ち合わせていたことは否定しえない事実だからである。そして、現在の日本の地域社会において地域の安心・安全問題は緊要な課題であることからバウマンのコミュニティの概念規定は、きわめて示唆深い。

また、バウマンは、第8章「はきだめーゲッター」の冒頭に、次のような一文を書いている。「場所という概念にとって奇妙な出来事が、グローバリゼーションへの途上で起こった。場所が重要でなくなると同時に、重要になったのである・・・（中略）・・・かつて人々は、自分が属していて、保護をあてにできる（そして願わくば、実際に得られる）と信じるに足る場所を想定していた

が、その全体のなかで『社会』がしめていた場所に、ぽっかり穴が開いている……（中略）……『居場所の防御』は、およそ安全確保において必要不可欠の条件だが、それは近隣の問題、『コミュニティ』の仕事にならざるをえない。国家が役割を果たさなくなったところでは、広い世界がよってたかって壊しにかかっているこの『安全である』という感覚を調達してくれるのは、ひょっとしたらコミュニティーローカルなコミュニティ、形ある『実体的な』コミュニティ、メンバーだけが居住する（『所属していない者は誰もいない』領域において具現化されたコミュニティーということになるのであろうか」（同書、p154）。すでにみてきたように、パウマンは、エリートが住む「ゲテッド・コミュニティ」と最下層の「ゲッター」をあげているが、安心と場所の問題は、ローカルなコミュニティの実態分析を進めてきている筆者にとって、大変示唆に富む指摘である。

なお、次にとりあげるG.デランティは『コミュニティ』の中の第6章において、パウマンについてふれている。「パウマンは、トゥレーヌやハバーマスと同様、コミュニティに対して極度の懐疑心を抱いている。コミュニティは安全を約束するが、結果としては、ノスタルジアと幻想しかもたらさない」（Delanty, 2003=2006, p163）と、デランティは言いきっていることを付け加えておく。

3 帰属と場所——G.デランティの『コミュニティ』

では、次にG.デランティの『コミュニティ』を見ていこう。デランティは、本書の刊行目的を「コミュニティという概念に今日的な解釈をほどこすこと」（同書、p3）と述べ、「その出発点におかれるのは、社会・文化・政治の各領域で大変動が起こった結果、コミュニティが今や転換点にあるという認識である」（同上）としている。これにつづけて、「古典的な社会学者たちはコミュニティの消滅を確信していたのであるが、事態はそれとは著しくかけ離れている。コミュニティは今日の社会・政治状況の中で復活を遂げつつあり、世界的規模でルーツ探しやアイデンティティの探求、帰属に対する欲求を生み出している」（同上）と述べる。

では、それは何故か。「その理由はおそらく、コミュニティの理念が、モダニティの不安定な条件下における帰属探しと関連があるという点にある。今日見いだされるコミュニティの関心は、グローバルゼーションによって引き起こされた連帯や帰属の悪化の危機に対する一つの反応とみなすことができる」（同書、p4、傍点引用者）。つまり、デランティは、コミュニティを、帰属と見なしていることがわかる。

このような認識の下に、デランティによれば、「本書の構成は、政治哲学、社会学、社会人類学、歴史学の視点を含み込んだ学際的アプローチという考え方を反映している。それぞれの章は、哲学や社会科学分野の古典的なコミュニティ概念から始まり、それがどのように現代の状況へと転換したかを描き出している」（同上、p8）と、その方法論的特徴について述べ、さらにデランティは続ける。「これは、コミュニティの興隆、衰退、再生についての物語である。19世紀がコミュニティの世紀だった—キリスト教の伝統にさかのぼるものであったが—のに対して、20世紀の諸言説は、全体的にみて、コミュニティの危機をめぐるものだった。コミュニタリアニズム、最近のポストモダン思想、コスモポリタニズムやトランスナショナリズム論に見られるように、20世紀の最後の10年から今世紀初頭にかけて、コミュニティは復活を遂げている」（同書、p8）と述べ、とくに3章以降の新たなコミュニティの動きを「コミュニティの復活」と位置づけているのである。

では、各章についてみていくこととしよう。まず第1章は「理念としてのコミュニティ—喪失と回復」と題するもので、西洋思想と西洋政治に現れた歴史上のコミュニティの言説について概観している。一つ目は、ギリシア思想とキリスト教思想の遭遇のなかでのコミュニティという理想の出現。二つ目は、古代思想から中世の諸制度の衰退に端を発する喪失の言説。三つ目はコミュニティの基礎としてのモダニティとユートピア的政治イデオロギーの議論。四つ目は、ファシズムの政治イデオロギーとトータル・コミュニティの議論。その結果、「これらの非常に多様なコミュニティ概念の中に共通するものがあるとすれば、それは、ラテン語でコムタス（*communitas*）、すなわち、いかなる社会的もしくは政治的取り決めにも換言できない、帰属の一表現としてのコ

コミュニティという見方である。コミュニティはあらゆる時代において帰属を表す強力な理念として自己主張した。そうした理念的性格のゆえに、コミュニティのリアリティは、自らの社会のもっとも『社会的な』側面であるとする説得力によって支えられることとなった」（同上、p18）という。

第2章は「コミュニティと社会—モダニティの神話」と題して、近代社会学と文化人類学の中で展開されたコミュニティと社会についての三つの主要な議論を展開している。一番目は伝統としてのコミュニティで、とりわけテーニスに注目している。二番目は、道徳コミュニティという発想で、とくにデュルケムをとりあげている。第三番目は、ターナーが最初に提示し、最近ではコーエンが再びとりあげている象徴的コミュニティの理論である。本章の結論としては、「コミュニティは、現実の制度的取り決めというよりもむしろ、流動性の高いコムニタスの一表現—象徴的であると同時に対話的な帰属の一形式であり、変化しやすく、近代的でラディカルな社会関係、さらには伝統的な社会関係を支える能力をもったものとして解釈されねばならない」（同上、p44）としている。

第3章は、「都市コミュニティ—地域性と帰属」と題する。シカゴ学派、第二次世界大戦後の都市社会学やコミュニティ研究から始めて、D.ハーベイ、N.スミス、M.デイヴィスを中心としたポスト・シカゴ学派の都市社会学の検討へと移る。とくに3節では、M.カスティル、J.A.ルグドの研究について議論し、そこでの焦点を都市コミュニティの再ローカル化に据え、都市の衰退というビジョンと比較し、都市のエンパワーメントについても検討している。結論としては、「都市はより一層ゲゼルシャフトを基礎にしつつあるとはいえ、それでもなお、コミュニティの重要な容器であると考えた」（同上、p97）としている。

4章の「政治コミュニティ—コミュニタリアニズムとシティズンシップ」は、コミュニタリアン思想にみられるコミュニティの復権を取り扱っている。こうした文脈にそって、政治的コミュニティという考え方に戻り、ここでは、シティズンシップの一表現としての帰属の問題に重点を置いている。以上から、二つの結論を導き出している。「第一に、コミュニタリアニズムは一般

に、脱伝統的なコミュニティ概念を反映したものである。第二に、それは脱伝統的な側面を持っているが、その多元的な能力は限定されている」（同上、p125）。

第5章の「コミュニティと差異—多文化主義の諸相」は、多文化主義という具体的な問題と、異なる文化的コミュニティ概念間の対立という論点に移る。伝統的多文化主義、近代的多文化主義、さらにはポスト多文化主義の三つに区分し、さらに10の多文化主義モデルについて検討をおこなっている。結論としては、「西欧の多文化主義は、第一に、多様性は原則として文化的アイデンティティの水準によって基礎付けられているということ、そして、第二に、こうした多様性は主として、支配的な国民社会とはまったく切り離された、比較的同質的な移民集団のエスニックな諸価値によって形成されるという前提に基づいている」（同上、p151）としている。

第6章の「意義申し立てのコミュニティーコミュニケーション・コミュニティという神話」では、まず、コミュニティに関するいくつかの批判理論（ハーバーマス、トゥレーヌ、パウマン）について検証したうえで、ハーバーマスに即して、コミュニケーション・コミュニティという考え方について議論する。次に、コミュニティと社会運動と関わりについて論じる。次いで個人主義という概念を再検討するために検討を行う。その結果、「本章での議論は、社会と個人が変化した結果、コミュニティに向かう空間が出現しつつあるとするものである。このことは、社会運動と集合的な闘争のケースに如実に表れている。このことから示唆されるのは、構造や文化的価値よりも実践によって定義されるものとしてのコミュニティを強調する立場であり、構築主義的なコミュニティの解釈である。現代のコミュニティは、より一層意図的に構築されるものであり、集団形成である」（同上、p179）としている。

第7章の「ポストモダン・コミュニティー統一性を超えるコミュニティ」では、コミュニティをめぐる主なポストモダン理論に対する批判的議論を提示し、統一性を超えるコミュニティという考え方について考察する。例として取り上げるものは、日常生活、ニューエイジ・トラベラー、嗜好というコミュニティである。結論としては、「ポストモダン・コミュニティは、コミュニティ

の開放性という考え方を基礎にしている。これらの哲学的は発想の多くは境界的な空間に登場するコミュニティの事例と関係あるといえよう」（同上、p205）と述べている。

第8章の「コスモポリタン・コミュニティローカルなものとのグローバルなものの間」では、国民国家の枠を超えるコミュニティという意味での、とくにグローバリゼーションという文脈の下でのコスモポリタン・コミュニティの問題を紹介し、世界コミュニティとトランスナショナル・コミュニティを取り巻く、様々な表現について考察している。その結果、デランティは、「本章、および、さらには本書全体の分析から引き出される主な結論の一つとして、コミュニティは多様な形で存在するということを挙げることができる。ということは、コミュニティについて、従来考えられてきた以上に多様なアプローチが求められるということである」（同上、p231）としている。

第9章の「ヴァーチャル・コミュニティコミュニケーションとしての帰属」では、今日最も重要なコミュニティの概念の一つ、すなわちヴァーチャル・コミュニティについて考察している。本章の主要な論点は、「ヴァーチャル・コミュニティは伝統的あるいはその他のコミュニティと同じくらい現実的であるということであり、その際際だった性格として、コミュニケーションを帰属の基本的な特徴にする能力を挙げることができる点である。コミュニケーションは、その中で帰属が今日非常に重要な方法で表現されている媒体である。このことはヴァーチャル・コミュニティがコミュニティの一形態に他ならず、その他のコミュニティと平行して存在しているという議論へ導く」（同上、p236）としている。

以上、9章までの概要を紹介してきたが、すでに見てきたように、3章以降の新たなコミュニティの動きを、デランティは、「コミュニティの復活」と位置づけていた。ところが、結論では、こうした「今日におけるコミュニティの復活は、明らかに、場所と関係する帰属が危機に陥っていることと結びついている」とし、それ故、これらの新たなコミュニティは、「帰属に対する希求以上のものでなく、これまでのところ、場所に代わるものとなっていない。コミュニティが場所との結びつきを確立できるか、それとも想像された条件にとどま

るかが、将来のコミュニティ研究にとって重要なテーマとなるであろう」（同書、p272）と言い切っているのである。つまり、あれほど高らかに論じていた「コミュニティの復活」を、ここに至って否定するような言説である。

以上から、結果として、真の意味での「コミュニティの復活」は、「場所」のコミュニティが形成されてはじめて成立すると理解できる。日本で継続的に「地域」で実態調査を実施している筆者からすれば、「何を今更という思い」を強くする結論である。問題は「コミュニティが場所との結びつきを確立できるか」の先にある。これをどのような方法ですすめるかという問題であるが、しかし、この点について、デランティは、答えを用意していない。

4 市民参加と社会関係資本——R.D.パットナムの『孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生』

では、最後にR.D.パットナムの『孤独なボーリング』をみていこう。本書は、米国コミュニティの崩壊と再生のありかを探ったものである。前掲デランティの本では4章の「政治コミュニティ」の中で、パットナムについてふれている。パットナムのコミュニティ概念について、デランティは、「過去についてのノスタルジックな観点を含んでいる」（同書、p116）と言及している。本書で用いられている分析概念である「社会関係資本」は本書が刊行されて以降、わが国でも盛んに紹介されるようになってきている³⁾。その概念の意味するところは、本書によれば、「社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」（同書、p14）である。これは、パットナムがすでにイタリアにおいて1970年代導入された地方制度改革を扱った『哲学する民主主義』（河田潤一訳、NTT出版）において用いた概念でもある。

さて、本書は5部構成となっている。第1部は、本書の主題である「米国における社会変化の考察」が提示されている。つまり、本書のテーマは、「米国コミュニティにおける市民・社会生活に、続いて一体何が起こったのか」（同書、p14）である。これを、「近年、米国社会の特性の変化を考察する上で社会科学者が用いるようになった概念が『社会関係資本』である」（同上）と、パットナムはこれを用いて米国コミュニティの崩壊と再生を分析することを述

べる。

これを受け、第2部では、「市民参加と社会関係資本における変化」を分析している。具体的には、第1に政治参加、第2に市民参加、第3に宗教参加、第4に職場でのつながり、第5にインフォーマルな社会的つながり、第6に愛他主義・ボランティア・慈善事業、第7に互酬性・誠実性・信頼、最後に、つながりの減少に対する明らかな反証事例として、小集団、社会運動、インターネットに目を向けている。いずれの領域についても、マクロデータを使って分析している。

その結果、以下のような結論が得られる。パットナムによれば、「それぞれの領域のなかでは、本流や逆流、また小さな渦などに遭遇することになるが、一方で20世紀の米国社会を流れる、どの領域にも共通する強力な潮流を見出すことになるだろう。中心テーマはシンプルである—20世紀が始まり前半の三分の二が過ぎるまで力強い潮流が流れており、米国人のコミュニティ生活への参加は、かつてないほど深まっていた。しかし、20~30年前—静かに、前触れもなく—潮流は逆転し、われわれは非常に危うい離岸流にさらされることになった。何の前触れもなくこの世紀後半の三分の一を通じて、人々は互いから、また自身のコミュニティから引き離されてしまったのである」（同書p28）と述べている。

第3部のタイトルは「なぜ？」である。つまり、その原因の追及がテーマであり、過剰労働、郊外へのスプロール現象、福祉国家から女性革命、人種差別からテレビ、移動の拡大から離婚の増加といった説明要因をとりあげ、それぞれについて分析・検討している。その結果、労働、スプロール、テレビ、そして最も重要な要因として「世代的变化」をあげ、これを決定的理由として導き出している。

第4部は、「それで？」を問うている。パットナムによれば、「測定可能で十分な証拠のある仕方で、社会関係資本はわれわれの人生に巨大な違いを生み出す」（同書、p355）と述べ、この第4部では5つの具体的な領域をとりあげ、分析を試みている。5つの領域とは、児童福祉と教育、近隣地域、経済的繁栄、健康と幸福感、民主的市民性と政府のパフォーマンスである。その結果、

「社会関係資本は、人々の生活の多くの側面に対して、強い、そしてはっきりと測定可能な影響力を及ぼすことが明らかになる。危機に瀕しているのは、コミュニティの内にある単に温かで、抱きしめたいくなるような感情やときめきではないのである。学校や近隣関係が、コミュニティの結束が弱まっている状況ではうまく機能しないこと、そして経済、民主主義、さらには健康や幸福までもが、社会関係資本の十分は蓄積に依存していること」（同上、p27）を明らかにしている。

最後に、「何がなされるべきか」と題する第5部においては、これまでの見通しの暗い現状の診断から、治療法を探る取り組みに視点を転じる。つまり、流れを逆転させるために何ができるかと問題である。その結果、「一世紀前、米国人が直面していた社会的・政治的問題は、現在われわれが取り組まなければならない課題と非常に酷似していることが明らかになる（同書、p27）と述べる。その上で、パットナムは、「先祖がどのように反応したのかということから、学ぶことは多い。それはとりわけ、われわれを取り巻く市民的衰退は覆しうるのだ、ということである」（同上、p27）と述べ、最後に「本書はこの現代病に対する単純な治療法を提供するものでない。最終部の目的は、21世紀において米国の市民参加と社会的つながりをいかにして取り戻すかという全国的な議論を誘発する（そして望むらくはそれに貢献する）ことである」と結んでいる（同上、p27）。

簡単であるが、以上が本書の内容紹介である。本書を通読して強く感じたことは、デランティの言う「コミュニティと場所との結びつき」のありようが、社会関係資本の各州の分析にみられるように、米国一国内においても同様ではなく、ましてや国家間においては国の歴史、社会経済的諸制度、宗教、文化などによって異なるということである。わが国においてもパットナムが行ったアメリカのコミュニティの分析結果と同様に、1970年代をピークに、「コミュニティと場所とのつながり」は希薄化の傾向があるといえるだろう。その帰結が、現在のコミュニティ政策のとりくみにつながっているのである。

しかしながら、パットナムの言う市民参加の領域についてみると、NPO法は1998年に制定されたばかりで、わずか10年前のことである。その結果、いわ

ゆるNPO法人はいまや3万を優に超えるまでに至っているほど、拡がりをみせている。また、いわゆる地縁組織としての町内会・自治会は、加入率が減少傾向にあるとは言え、依然として日本全国で9割以上の組織率を保持している。それ故、単純にパットナムが用いた「社会関係資本」の各指標をわが国に適用して、コミュニティの崩壊及び再生をはかれるものでない。かように「コミュニティと場所との結びつき」のありようは、単純に抽出できるものでない。

問われるべきは、いかなる方法と手立てをもって、市民の主体的参加と自治を確保できるである。まさにコミュニティの再生のありか、その手立てが問われていると筆者は考える。

5 おわりに—コミュニティ概念の再構築を目指して

以上、Z.バウマン著『コミュニティ—安心と自由の戦場—』、G.デランティ著『コミュニティ』、R.D.パットナム著『孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』の3冊のレビューを終えることになるが、本稿の主題が、コミュニティの概念の再検討であることからすると、バウマンおよびデランティの著書は、コミュニティ概念を正面から扱ったものであり、パットナムの著書は、米国コミュニティの実証研究として位置づけることができる。

その上で、三人のコミュニティ概念を整理すると、バウマンはコミュニティを「安全」として規定し、デランティはコミュニティを「帰属」としてとらえ、パットナムはコミュニティを「社会関係資本」と同義にとらえている。そして三人に共通していることは、コミュニティの回復を望んでいることである。それは、とりもなおさず、グローバリゼーションの進展を背景にコミュニティが崩壊もしくは危機的状況にあるとの状況認識が存在する。この点からすると、まさに世界のコミュニティ研究は同一の方向に向かって進んでいることは確かであるといえよう（和田2008b,2009b）。

しかしながら、課題は残されている。すでにみてきたように、バウマンの著書の終章において、「今日におけるコミュニティの復活は、明らかに、場所と関係する帰属が危機に陥っていることと結びついている」と述べ、それ故、こ

れまで紹介してきた新たなコミュニティは、「帰属に対する希求以上のものでなく、これまでのところ、場所に代わるものとなっていない。コミュニティが場所との結びつきを確立できるか、それとも想像された条件にとどまるかが、将来のコミュニティ研究にとって重要なテーマとなるであろう」（同書、p272）と結論しているのである。また、バウマンにおいても、グローバル化と「場所」についてふれ、「ゲートド・コミュニティ」と「ゲッター」という二つの、しかも両極端のコミュニティのタイプを提示し、コミュニティにおける「場所」の問題に切り込んでいるのである。

かつて、筆者は、コミュニティ概念における「場所」性（＝地域性）について、マッキーバーのコミュニティ概念に依拠して次のように述べている。

「マッキーバーは、名著『コミュニティ』の副題を、『社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論』とした。マッキーバーが本書であきらかにしようとしたのは、社会生活の基本法則の解明であり、それをコミュニティとアソシエーションの二つの概念で説明したのであった。現代のコミュニティ理論に問われているのは、人々の生活が個人化し・拡散化するなかで、関係としてのアソシエーションをどう構築し、これをどう地域につなげていくかであると筆者は考える。あらためて「共同性」と「地域性」が問われているのである」（和田2004）。

以上、バウマン、デランティ、パットナムの著書のレビューをとおして、再び、コミュニティ概念における「場所性（＝地域性）」の問題が浮かび上がってきたことになる。

注

- 1) 近年のコミュニティ研究の活発化の背後にある「グローバリゼーション」の問題については、拙稿、2008b「地域の現場から『21世紀の変動』の質が見えてくる」、同、2009a「グローバル化とコミュニティ政策」、同、2009b「世界的大変動の中のコミュニティ研究に求められるもの」に詳しい。
- 2) 近年のわが国のコミュニティ政策の動向については、拙稿、2008a「コミュニティ政策の新たな展開と混迷」を参照のこと。
- 3) たとえば、宮川公男「ソーシャル・キャピタル研究序説」ECO-FORUM Vol.21. 統計研究会、2002年10月号、内閣府国民生活局編「ソーシャル・キャピタル——豊かな

な人間関係と市民活動の好循環を求めて——」独立行政法人国立印刷局発行、2003年3月、を参照のこと。

引用・参考文献

- Bauman,Z.,2001, Community : Seeking Safety in an Insecure World, Polity Press. 奥井智之訳、2008『コミュニティ安全と自由の戦場』筑摩書房
- Delanty, G.,2003, Community, Routledge. 山之内靖・伊藤茂訳、2006『コミュニティ』NTT出版
- Putnam,R.D.,1993, Making. Democracy Work , Princeton University Press. 河田潤一訳、『哲学する民主主義』NTT出版
- Putnam,R.D.,2000, Bowling Alone : Collapse and Revival of American Community, Simon & Schuster. 柴内康文訳、2006『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房
- MacIver,R.M.,1917 : Community, Macmillan and Co. Ltd. 中久郎・松本通晴ほか訳『コミュニティ』1975、ミネルヴァ書房
- 奥井智之、2008「訳者あとがき」Bauman,Z.,2001=2008、前掲書
- 山之内靖、2006「訳者解説—グローバル化と社会理論の変容」Dlanty,G.,2003=2006、前掲書
- 柴内康文、2006「訳者あとがき」Putnam,R.D.,2000=2006、前掲書
- 和田清美、2004「都市のコミュニティ研究—課題と方法」園部雅久・和田清美編著『都市社会学入門—都市社会研究の理論と技法』文化書房博文社
- 同、2008 a 「コミュニティ政策の新たな展開と混迷」『都市政策研究』第2号、首都大学東京都市教養学部都市政策コース
- 同、2008 b 「『地域』の現場から『21世紀の変動』の質が見えてくる」『現代社会の構想と分析』現代社会構想・分析研究所
- 同、2009 a 「グローバル化とコミュニティ政策」『都市政策研究』第3号、首都大学東京都市教養学部都市政策コース
- 同、2009 b 「世界的大変動の中のコミュニティ研究に求められるもの」『日本地域社会学会年報』第21集、ハーベスト社、